

## 資料

## 大学生の学校インターンシップに関する認識調査

—育成すべき資質・能力との関連を中心として—

鈴木 宏昭<sup>1)</sup>、山科 勝<sup>2)</sup>

1) 山形大学地域教育文化学部、2) 山形大学大学院教育実践研究科

[要約] 本研究の目的は、学校インターンシップ導入にむけて大学生への認識調査を実施し、その特質を解明することである。研究の結果として以下の2点を挙げることができた。まず、大学生は、これまでの教職課程の履修を通じて、学校インターンシップにて、児童理解や学級経営、学習指導に関する活動を希望していた。次に、他県や他大学での取組との相対化を通じて山形県における学校インターンシップの意義や必要性を山形県教員指標と関連付けながら検討することができた。大学生2年生と3年生の多くが、学校インターンシップで育成すべき資質・能力と、山形県が採用時に求める教員着任時の姿の資質・能力のうち、教職の実践に関する資質・能力の「児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。」が関連深いと回答していた。

[キーワード] 学校インターンシップ、学校体験活動、教育実習、大学生、認識調査

## 1. はじめに (研究の背景)

近年、学校現場を取り巻く課題が複雑・多様化している。そのため、多様な経験や専門性を持った教員の育成が求められ、児童の状況、学校教育の課題や方向性に応じて幾重にわたり教員養成の制度等の改善が行われてきた。最近では、社会から高度専門職業人としての教員が求められ、特に教職の実践や素養に関する資質・能力についての専門性が重視されている。そのうえ、文部科学省(2018)から新しい学習指導要領が告示され、児童に身につけさせたい資質・能力が明示され、小学校においても児童の立場に立った学習過程がますます重要になってきている。同時に、児童を指導する教員の資質・能力を向上させる取組やシステムの在り方について、継続的に検討を重ねていくことが必要とされた。実際、各大学の教職課程では「新しい時代に求められる資質・能力を育む教育課程」などを実現するための体制整備が行われている。具体的には、2017年(平成27年)に中央教育審議会が「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(答申)が出されたことを受けて、「学校体験活動」(以後、学校インターンシップと記載)を、教員免許の取得に必要な単位として認めることとなった。

ここで学校インターンシップの法的な位置づけを確認しておきたい。2019年4月から施行された教育職員免許法及び同法施行規則において、これまで教育実習と教職実践演習は、「教育実践に関する科目」として整理された。それによって、各大学の状況に応じて、教育実習の中に最大2単位まで学校インターンシップを含めることができることとなった。実際、この学校インターンシップは、これまでも、教職課程をもつ大学や都道府県や市町村の教育委員会のとりまとめに基づき実施されてきた、学校における学生ボランティアやスクールサポーターなどの活動と類似している。実質的には、これまでの学校における学生ボランティアの活動等による授業科目を教職科目とした考えることもできる。

学校インターンシップは、学校現場において教育活動や校務、部活動などの支援や補助業務などを体験させる取組である。長期間にわたって継続的に体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることでき、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効といわれている。

学校インターンシップは、これまでの教育実習と比較してみると、以下のように説明されている。

表1. 学校体験活動（学校インターンシップ）と教育実習の相違について

	学校体験活動（学校インターンシップ）	教育実習
内容	学校における教育活動や学校行事、部活動、学校事務などの学校における活動全般について、支援や補助業務を行うことが中心	学校の教育活動について実際に教員としての職務の一部を实践させることが中心
実施期間	教育実習よりも長期間を想定（ただし、一日当たりの時間数は少ないことを想定）	4週間程度（高等学校の場合、2週間程度）
学校の役割	学生が行う支援、補助業務の指示（教育実習のように学生に対する指導や評価は実施しない）	実習生への指導や評価表の作成（そのための指導教員を専任し、組織的な指導体制を構築）

（出典：文部科学省 中央教育審議会（2015）答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」の筆者による一部抜粋）

これまででは、教員免許を取得するため教職課程にて一定期間の教育実習が義務付けられているが、それらの期間が短く不十分だと指摘もあった。法改正等による教職課程に学校インターンシップが導入されることにより、学校現場に身を置き、学生が部活動や事務作業など授業以外の活動に触れることで、より教員の業務実態を把握し、自分自身の適性を判断できるようにして、結果的には、教員の質向上につながる事ができると考えられている。例えば、教育実習前に学校体験活動を行っておくことは早い段階で教育を「行う立場」への視点・姿勢の転換につながり、学生自身が「教員としての適性」を早期に把握する機会にもなりうるるとされているため有意義であるとされている。また、学校側にとっても、学校のさまざまな活動を支援する地域人材の確保の観点から有益とされている。現在、学校教育の業務は、非常に複雑・多様化している。例えば、いじめや不登校、発達障害や外国につながる子どもなどの学習や生活に関して、個別に専門的な教育的支援が必要とされている。最近では、GIGA スクール構想の実施により、学校における ICT 機器の管理や運用補助などの業務も追加している。学校インターンシップや学生ボランティアによって、その学校支援の一端を補うことが期待されている。ただし、大西（2021）は学校インターンシップに関する課題として「学生にとって、それらの教育的支援に係ることが有意義であったとしても、教員の多忙さを解消するための「無償の戦力」となっていない」と指摘している。学校インターンシップに参加する学生に過度に期待することは、教育問題のリスクを高めることに加え、学校教育が抱える人手不足や多忙さの根本的な問題を見えにくくする危険性を含んでいる。そのため、学校インターンシップの実施にあたっては、既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るほか、教育委員会や学校と大学の連携体制構築、学生に対する事前・事後指導などが必要である。

一方で、現在の世界の教員養成制度に目を向けると、教育実習制度は、国によってさまざまである。例えば、米国の教員養成制度と比較してみると、日本との共通している点としては、教員資格に免許主義が採用されており、教員養成が高等教育機関で行われている点である。八尾坂ら（2005）によれば、教員養成制度の詳細、例えば、免許制度や教員研修制度など、州ごとに多様な制度が存在しているものの、教員養成において授業に関する実践的能力が重視され、教育実習の時間が増えていることも共通傾向であると指摘している。また、米国の教育実習制度については、大倉（2021）が以下のとおり、詳しく説明している。「米国における『教育実習 (teaching practicum)』は、日本と同様に、教員免許を取得するために必須条件とされているものの、免許取得に要する過程や期間は、日本とは異なり、州に

よっては大学における半年の実習期間 (student teaching) と、卒業後の学校現場での3年間に及ぶ「仮免許」(provisional certificate) 期間の両方を要することがある」という。例えば、教育実習の臨床的アプローチで知られるアリゾナ州立大学教育学部では、初等教育レベル (第1学年から第8学年) での教員免許を目指す3年次の学生に1年間を通じて週1回の教育実習 (4単位・Clinical Experience) を、4年次生には、1年間のフルタイムの実習 (12単位・Student Teaching) を志望者に課している。米国の教育実習制度の全体的な傾向としては、教員免許取得に長期間を要することで、教育実習の質が、単に授業を行うといった実務から児童生徒の反応や指導教諭からのフィードバックをもとにした臨床的な体験へと重点が移行しているという。このようにしてみると、大学の教員養成課程における教育実習に関する世界的な潮流として、その重要性が増しているものと思われる。

日本の教員養成課程では、教育実習について以下のとおり定めている。現行の教育職員免許法では、小学校教諭1種免許状取得に必要な教育実習の単位が5単位と定められている。山形大学にて小学校教員免許を取得すること希望した場合、以下のよう教育実習科目の履修が必要となる。

表2. 山形大学における「教育実習」のシステムについて

	科目名	単位数	標準履修年次	科目の概要
1	教育実践基礎実習 (幼・小)	1単位	2年次	実習期間：1週間 実習校：附属小学校 *附属小学校での授業研究会 (6月に開催) の参加を含む。
2	教育実践実習A	3単位	3年次	実習期間：3週間 実習校：附属小学校及び大学近隣の協力校。
3	教育実践実習事前・事後指導 (幼・小)	1単位	3年次	授業回数：7回程度 事前指導は、教育に対する使命感と情熱、問題意識を持って教育実習に臨むための心構えと準備を行うもの。事後指導は、それらについて自己省察を行うもの。

(出典：山形大学地域教育文化学部学生便覧 (2019) 及び山形大学シラバス (2021) より一部抜粋)

そのような状況の中、山形大学の学校インターンシップでは、大学4年後期 (初実施は令和4年度) に、中長期間、山形大学附属学校園および山形市内の小学校で実施予定であるという。ここでは、定期的に部活動や学校行事に参加することを想定している。なお、東北6県 (青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島) にある国立大学 (弘前大学、秋田大学、岩手大学、宮城教育大学、福島大学) にて、法改正に伴い小学校教員養成課程の教育実習科目群に学校インターンシップの科目を導入している大学は、山形大学を含めてわずかである。そのため、小学校教員養成課程にて、どのような学校インターンシップを実施すべきかどうかに関する知見の蓄積もわずかであろうことが予想される。

そこで本研究では、山形大学にて令和4年度より初実施となる学校インターンシップ導入にむけて課題などを解明するため、山形大学の学生を対象に学校インターンシップに関わる様々な基礎情報 (要望や必要な連携体制など) を調査するとともに、山形県における学校インターンシップの在り方を検討することとした。

本研究では、学校インターンシップの到達目標と山形県教員「指標」との関連性についても確認することとした。教員の資質・能力の育成は、教員の養成から研修の段階まで様々な段階がある。教員の養成・研修における大学と教育委員会、学校等との連携の必要性、重要性が指摘されて久しいものがあり、

大学や自治体等による自主的かつ意欲的な取組が行われてきた。その中でも、平成 27 年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、「教員育成協議会（仮称）」の創設を提言し、大学と教育委員会、学校等との連携を一段と進め、高度なレベルでの教員の養成・研修を実現することを目指している。実際に山形県においても、山形県教育委員会（2018）は、県内教職課程認定大学及び各市町村教育委員会、各学校、保護者、産業界の共通認識を得るとともに、山形県の教員が高度専門職としての職責、経験及び適性に応じて身に付ける資質を明確化した指標として、山形県教員「指標」を定めた。それら「指標」では、山形県の教員が主体的に資質向上を図る際、教員としてのキャリアステージを「着任時の姿（初任時）」、「始発期（初任時～3年目）」、「成長期（4年目～10年目）」、「充実期（11年目～20年目）」、「組織運営期（21年目～退職）」の5段階に分けて、見直し、自らの職責、経験、適性に応じて、効果的・継続的な研修を行うための目安であり、県教育委員会が研修計画を策定する際に踏まえるべきものとされている。例えば、山形県の教諭（県立学校、市町村立小・中学校・義務教育学校の教諭及び主幹教諭）に求める「着任時の姿」として、「教職の実践に関する資質・能力」と「教職の素養に関する資質・能力」の視点から以下の表3のような資質・能力を示している。

表3. 山形県が採用時に求める教員着任時の姿（山形県教員「指標」）について

**【教職の実践に関する資質・能力】**

- A-1 児童生徒に対する深い教育愛をもっている。
- A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。
- A-3 学習指導要領を理解し、授業を行うことができる。
- A-4 学習評価の意義と方法について理解している。
- A-5 情報モラルを正しく理解し、ICT機器の適切な活用ができる。
- A-6 インクルーシブ教育システムの考え方を理解している。

**【教職の素養に関する資質・能力】**

- B-1 言葉遣いやマナーなどの社会人としての常識を身に付け、円滑な人間関係をつくることことができる。
- B-2 明るく、心身ともに健康で、教養と教育に対する専門性を身に付けている。
- B-3 学び続ける教員の重要性について理解している。
- B-4 教育公務員にふさわしい倫理観と規範意識を備え、教育に対する強い使命感・責任感をもっている。
- B-5 山形県の教員として、郷土を愛する心を持ち、人とのつながりを大切にして、地域社会においてよりよい学校・園を築こうとしている。
- B-6 危機管理の重要性を理解し、危機意識をもって行動しようとしている。

（出典：山形県教育委員会より筆者が一部抜粋、それぞれの資質・能力に記号（A-1 など）を追記）

## 2. 本研究の目的と方法

本研究は、山形大学にて令和4年度より初実施となる学校インターンシップ導入にむけて課題などを大学生への認識調査を中心に実施するとともに、その在り方を検討することを目的とする。調査対象は山形大学地域教育文化学部では、令和4年度（2022年度）後期より、児童教育コース4年生を対象に、学校インターンシップ（科目名：「地域学校協働インターンシップ」）開講される予定である。そのため、本調査では、科目開講初年度対象となる山形大学地域教育文化学部学生（3年生）を調査対象者候補とした。また、3年生だけでなく、調査結果の信頼性と妥当性を高めるため山形大学地域教育文化学部にて小学校教員免許取得を希望する学部2年生も追加することとした。学校インターンシップに関する文献調査やWEB調査で得られる情報は、制度的なものにとどまるため、また、山形大学にて学校インターンシップを開講するのが令和4年度（2022年度）後期からとなるため、学校インターンシップに関する実態の詳細を把握するために質問紙調査を実施することとした。

## 3. 学校インターンシップに関する調査票の構成とその結果

本研究の調査は、山形大学地域教育文化学部学生の2年生及び3年生を対象に実施した。また、質問紙調査の回収率を高めるため、教職課程必修科目の授業冒頭にて調査を実施した。調査の実施概要は以下の表4のとおりである。なお、調査票は巻末の別紙資料のとおりである。

表4. 調査の実施概要（実施時期と方法など）

	2年生（対象人数85名）	3年生（対象人数81名）
実施時期	2021年11月9日（火）	2021年11月10日（水）
実施方法	2年生必修科目授業にて実施 授業冒頭に質問紙調査の実施	2年生必修科目授業にて実施 授業冒頭に質問紙調査の実施
回収数（回収率）	82（96.5%）	66（81.5%）

学校インターンシップで習得することができる、もしくは習得したい資質・能力について次のような質問1を設定した。「質問1：学校インターンシップ（科目名：「地域学校協働インターンシップ」）にて、受講者が習得することができる（習得したい）資質・能力とは、どのようなものだと考えていますか。」

この質問に対して大学3年生は、「児童生徒一人ひとりに対する理解をもとにした柔軟な対応力」や「児童とのコミュニケーションを通して、より良い学級経営や児童との関わり方を学ぶ」というような児童理解や学級経営に関する回答、「授業実践に関する力（授業コーディネート、教材研究）」や「学指の内容に沿って授業を行うことができる」、「児童生徒の実態を把握し、それに応じた授業構造や展開を考え、実行する能力」というような学習指導に関する回答、さらには、「（教採後の受講であること、4年間の学びをふまえたものであることから、）教員としての責任感」や「長時間（実習と比較して）学校業務に関わることができると思うので、児童生徒と話をしたり授業をしたりして深く関わり児童生徒理解につながると思います。」といった教員として働くことを意識した回答が多かった。そのほか、「障害をもつ子ども等への適切な指導の仕方を身につけている」というような特別支援に関する回答もあった。

一方で大学2年生は、大学3年生と同様に、「児童生徒に応じてよりよい関係づくりについて理解する力」や「児童の心情を理解することができる力」というような児童理解に関する回答のほか、「よりわかりやすい教科指導のやり方。教材研究の仕方」というような学習指導に関する回答が多かった。そのほか、「地域と連携して問題を解決できる力」など、学校と地域の連携に関する回答もあった。また、質問1に関連して次のような質問2を設定した。質問は、「質問1で回答した資質・能力は、山形県が採用時に求める教員着任時の姿（山形県教員「指標」より）」で示された教員の教職の実践及び教職の素養に関する資質・能力いずれかと関連深いと思いますか。最も関連深い資質・能力をA-1からB-6の中から一つ選び記号で教えてください。」とした。山形県教員「指標」で示された資質・能力を表3のとおり、A-1からB-6としてその関連性を調査する質問項目とした。この質問に対する回答結果は以下の表5のとおりである。

表5. 学校インターンシップで育成すべき資質・能力と山形県教員「指標」の関連について

有効回答：2年生（N=81）3年生（N=66）

	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6
2年生	8 (9.88%)	35 (43.2%)	6 (7.41%)	0 (0%)	2 (2.47%)	0 (0%)
3年生	8 (12.1%)	28 (42.4%)	5 (7.58%)	0 (0%)	3 (4.55%)	2 (3.03%)
	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6
2年生	2 (2.47%)	11 (13.6%)	5 (6.17%)	4 (4.94%)	6 (7.41%)	2 (2.47%)
3年生	6 (9.09%)	3 (4.55%)	3 (4.55%)	2 (3.03%)	6 (3.03%)	0 (0%)

表5のとおり、大学3年生は、教職の実践に関する資質・能力の「A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。」と4割以上が回答した。続いて、教職の実践に関する資質・能力の「A-1 児童生徒に対する深い教育愛をもっている。」が12%程度、教職の実践に関する資質・能力の「B-1 言葉遣いやマナーなどの社会人としての常識を身に付け、円滑な人間関係をつくることことができる。」が9%であった。

一方で大学2年生は、大学3年生と同様に、教職の実践に関する資質・能力の「A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。」と4割以上が回答した。続いて、教職の素養に関する資質・能力の「B-2 明るく、心身ともに健康で、教養と教育に対する専門性を身に付けている。」が13%程度、教職の実践に関する資質・能力の「A-1 児童生徒に対する深い教育愛をもっている。」が9%であった。大学3年生と2年生では、ともに4割以上の学生が、学校インターンシップを通じて、山形県教員「指標」で示された山形県が採用時に求める教員着任時の姿の資質・能力のうち、教職の実践に関する資質・能力の「A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。」が関連深いと回答していた。

次に、学校インターンシップで習得することができる、もしくは習得したい資質・能力について次の質問3を設定した。「学校インターンシップ(科目名:「地域学校協働インターンシップ」)では、実習校にてどんな学校体験活動を実施したいと考えていますか。以下の選択肢の中から一つ以上選び番号に○を付けてください(複数回答可)。」この選択肢は、文部科学省の活動例を参考に以下の6つとした。

表6. 文部科学省の学校インターンシップの活動例について

1 児童、生徒等の話し相手、遊び相手
2 授業補助
3 学校行事や部活動への参加
4 事務作業の補助
5 放課後児童クラブ、放課後教室、土曜授業の補助
6 その他

(出典：文部科学省(2015)の資料より一部抜粋)

この回答結果は、以下の表7とおりである。質問項目を複数回答可としたこともあり、多くの大学生が複数選択して回答していた。

表7. 大学生が学校インターンシップで希望する活動内容について

有効回答：2年生(N=82) 3年生(N=66)

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
2年生	56	41	42	28	17	1
3年生	44	32	38	31	29	3

表7のとおり、3年生は、「児童、生徒等の話し相手、遊び相手」と回答した学生がもっとも多く、比較的多く学生は、「授業補助」、「学校行事や部活動への参加」と回答していた。その他の回答としては、「発達障害等で特別に支援が必要な子に対するサポート」との回答があった。一方で2年生は、「児童、生徒等の話し相手、遊び相手」と回答した学生がもっとも多かったことは大学生3年生と同様であったものの、大学生3年生と比べて、「放課後児童クラブ、放課後教室、土曜授業の補助」と回答した学生が比較的多かった。本調査では、「授業補助」と回答した学生には、対象とした教科についても調査した。その調査結果は以下の表8のとおりである。

表 8. 授業補助の対象教科について

有効回答：2 年生 (N=33) 3 年生 (N=22)

	国語	社会	算数	理科	外国語	その他
2 年生	5	3	5	7	4	9
3 年生	1	1	5	4	3	8

表 8 のとおり、授業補助の対象教科については、特定の教科が多いという傾向が感じられないかった。その他、すべての教科の授業補助を担当したいといった回答があった。

最後に、学校インターンシップの科目履修を検討するにあたり、何か要望などの有無を質問した。その結果、3 年生は、「自宅との距離を考慮して配当していただけるなどしてほしいです。」や「他の必修科目（落としてしまった場合も含めて）と時間割が被らないようにしていただきたいです。」「小学校以外の校種（高校など）を選べるようにしてほしい。」というような科目の運営上の留意点に関する要望が寄せられた。一方で 2 年生は、「授業だけではなく、児童の放課後の活動にも触れてみたい。より児童と近い位置で実習を行いたい。」といった放課後の学校支援に関する要望や、「事務作業についてほとんど知らずに新任になるのは怖いから少しでも体験、経験したい。」教員の事務作業に関する回答もあった。その他、「社会人としての常識というものを事前に学習したい。」教職に限らず、社会人としての素養を身に付ける機会をとらえていた。

#### 4. 本研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、山形県における学校インターンシップを実施するために必要な基礎情報を収集することができた。大学生は、これまでの教職課程の履修を通じて、学校インターンシップにて、児童理解や学級経営、学習指導に関する活動を希望していた。また、他県や他大学での取組との相対化を通じて山形県における学校インターンシップの意義や必要性を山形県教員指標と関連付けながら、検討することができた。その結果、大学生 2 年生と 3 年生の多くが、学校インターンシップで育成できる資質・能力と、山形県が採用時に求める教員着任時の姿の資質・能力のうち、教職の実践に関する資質・能力の「A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。」が関連深いと回答していた。本研究により得られた知見は、これからの新時代における学校インターンシップを含めた教育実習全体の在り方に関する基礎情報として活用できると思われる。具体的には、山形大学の学校インターンシップにおける必要な連携体制および事前・事後指導における教材などを検討する際に役立つものと思われる。これまでの教員養成では、時代に応じた教育課題解決に資する専門的な知識や技能を育成することが優先されてきたきらいがあるが、これからは絶えず時代の変化に対応し、教員養成の教育内容と教育方法を更新していかなければならない。そのための一つの新制度が学校インターンシップの導入なのかもしれない。こうした科目の導入によって、新時代に対応した教員養成や教員研修を進めていくことが可能となろう。また、教員免許状の有無や種類や数だけでなく、教員免許状を取得するための教職課程科目の履修状況に応じた教員の養成・採用・研修の一体化を検討していく必要があるかもしれない。

今後、本研究で得られた知見に加えて、日本や山形県、山形大学の教育事情に鑑みながら、山形県における効果的な学校インターンシップ制度を具体的に検討する必要がある。それらについては今後の課題としたい。

#### 付記

本研究における調査（大学生への質問紙調査）は、山形大学地域教育文化学部倫理委員会の承認を得て実施したものである。また、本研究は、公益財団法人やまがた教育振興財団令和 2 年度「教員養成に関する調査研究事業」研究題目「山形県における学校インターンシップの在り方に関する調査研究」の助成を受けて実施したものである。

引用・参考文献

- ・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領』東洋館出版社。
- ・文部科学省中央教育審議会（2017）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）（中教審第184号）」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm)
- ・大倉健太郎（2021）「教育実習」, アメリカ教育学会（編集）『現代アメリカ教育ハンドブック〔第2版〕』東信堂、109頁。
- ・大西祐司（2021）「Q7 教員養成における学校体験活動の意義について論じなさい」三田部勇, 米沢崇（編著）『教育実習・教職実践演習（新・教職課程演習）』協同出版、22-23頁。
- ・八尾坂修, 貞廣齋子（2005）「1章 アメリカ」日本教育大学協会編『世界の教員養成〈2〉欧米オセアニア編』学文社、17頁。
- ・山形大学地域教育文化学部『学生便覧－履修と学生生活の手引き－（2019年度入学者用）』
- ・山形県教員「指標」及び山形県教員資質向上協議会  
<https://www.pref.yamagata.jp/700001/bunkyo/kyoiku/iinkai/kyouikuiinkai/iinkaikyougikai/shihyou.html>



## 【別紙資料】

## 学校インターンシップに関するアンケート

1. 学校インターンシップ(科目名:「地域学校協働インターンシップ」)にて、受講者が習得することができる(習得したい)資質・能力とは、どのようなものだと考えていますか。あなたの考えを述べてください。また、その資質・能力は、以下の参考資料①「山形県が採用時に求める教員着任時の姿(山形県教員「指標」より)」で示された教員の教職の実践及び教職の素養に関する資質・能力いずれかに関連深いと思いますか。最も関連深い資質・能力をA-1からB-6の中から一つ選び記号で答えてください。

<資質・能力>

関連深い資質能力 ( )

参考資料①: 山形県が採用時に求める教員着任時の姿(山形県教員「指標」より)

【教職の実践に関する資質・能力】

- A-1 児童生徒に対する深い教育愛をもっている。  
A-2 児童生徒の実態に応じたよりよい人間関係づくりや集団づくりについて理解することができる。  
A-3 学習指導要領を理解し、授業を行うことができる。  
A-4 学習評価の意義と方法について理解している。  
A-5 情報モラルを正しく理解し、ICT機器の適切な活用ができる。  
A-6 インクルーシブ教育システムの考え方を理解している。

【教職の素養に関する資質・能力】

- B-1 言葉遣いやマナーなどの社会人としての常識を身に付け、円滑な人間関係をつくることができる。  
B-2 明るく、心身ともに健康で、教養と教育に対する専門性を身に付けている。  
B-3 学び続ける教員の重要性について理解している。  
B-4 教育公務員にふさわしい倫理観と規範意識を備え、教育に対する強い使命感・責任感をもっている。  
B-5 山形県の教員として、郷土を愛する心もち、人とのつながりを大切に、地域社会においてよりよい学校・園を築こうとしている。  
B-6 危機管理の重要性を理解し、危機意識をもって行動しようとしている。

2. 学校インターンシップ(科目名:「地域学校協働インターンシップ」)では、実習校にてどんな学校体験活動を実施したいと考えていますか。以下の選択肢の中から一つ以上選び番号に○を付けてください(複数回答可)。

- 1 児童、生徒等の話し相手、遊び相手  
2 授業補助(教科など: )  
3 学校行事や部活動への参加  
4 事務作業の補助  
5 放課後児童クラブ、放課後教室、土曜授業の補助  
6 その他 ( )

3. 来年度(令和4年度)以降、学校インターンシップ(科目名:「地域学校協働インターンシップ」)の科目履修を検討するにあたり、何か要望などございましたらご記入ください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。